

13 英国流儀

オッタバーンの戦いくさが終わり
大鴉おおがらすがついばみに来る前に
魔女がシダの野面のづらを馬で駆け
ノーサンバランド卿パーズィの名を唱えた

「起て 起つのだ ノーサンバランド卿よ 5
真実まことを答えよ
お前ほどの立派な武将が
イングランド王に仕えていたのか」

そのとき死せるパーズィ起ちて言う
だがその手負いし傷は見るも無残 10
「イングランド王にはわしに劣らぬ強者つわもの五百人
いやさらに五百人だ」

だが頼む 明けゆく空にかけ
草原を渡る微風そよかぜにかけ
その眼でわしを見るのはよしてくれ 15
わしの魂を昇らせてくれ」

「起て 起つのだ ノーサンバランド卿よ
真実まことを答えよ
剣つるぎの腕たに長けたるお前のことだ
戦いくさの有様 これいかに」 20

「合戦かっせんの首尾はまさに伯仲
これぞ戦いくさの常
戦う者 逃げ惑う者とさまざま
一撃すら見舞わぬ者さえいた

頼む 明けゆく空にかけ 25

鳥たちの巣からの初音にかけ
その眼でわしを見るのはよしてくれ
安らかに眠らせてくれ」

「起て 起つのだ ノーサンバランド卿よ
真^ま実^{こと}を答えよ 30
もしお前と部下の兵士どもが生きかえったら
お前は どうするつもりだ」

「おお 鷹^{いぬ}や獵犬たちのこと
荒野を歩きまわる赤鹿のこと
野山を駆けまわる陽気な狐のこと 35
愛^{いと}しの娘たちのことなどを語りたい

剣や軍馬のことは語りたくない
無駄金を使ったと愚痴るだけ
最も勇敢に戦った者が
馬鹿をみたと自分を嗤^{わら}うだけ 40

だが頼む わしの砦^{とりで}にかけ
広間の食卓にかけ
頼む わが妻の寢室にかけ
(ああ それが一番つらいのだ)

その眼でわしを見るのはよしてくれ 45
わしの胸から手をどけてくれ
わしの顔を赤い陽の出から隠して
わしを休ませてくれ」

魔女はパーシィの眼から眼をそらし
胸から手をどけた 50
その顔を赤き陽の出から隠して
永遠の眠りにつかせた

「眠ろうが 目覚めようが ノーサンバランド卿よ
もうこれ以上語るにおよばぬ
いまわの際に語ったお前の言葉 55

イングランド人たちくれてやろう

セバーン川が西に流れるかぎり
ハンバー川が東に流れるかぎり
武勇優れたる者こそ
その誉 秘して語らせまいぞ

60

入江に戦^{いくさ}が続くかぎり
トウィード川が水嵩^{みずかさ}高く流れるかぎり
武勇優れば優れるほど
その誉 ますます秘して語らせまいぞ

獲物を追い続け 殺戮を繰り返し
潔^{いさぎ}よき勝負と 挙げたる功名
その裏には 裏切りと偽りの騎士道あり
この戦^{いくさ}の常を幾度も繰り返し伝えさせよう

65

偉業は大きければ大きいほど
それを笑い飛ばすことは ますます難しい
これぞイングランド人が肝に銘ずべきこと
最後の審判のその日まで」

70

(榊井幹生訳)